

# 戦後の京都と「赤線」の町

——水上勉「五番町夕霧楼」論

## 一、はじめに

水上勉「五番町夕霧楼」（初出、『別冊文藝春秋』秋季号、一九六二・九）は、一九五〇年七月に起きた金閣寺放火事件という実際の事件を扱っているため、発表当初より、放火事件という題材そのものに関心が向けられがちであった。<sup>①</sup>

一方、こうした同時代の反応とは別に、藤井淑禎『五番町夕霧楼』の復権<sup>②</sup>や岩淵宏子『五番町夕霧楼』は、娼妓夕子に注目し、その意味づけを積極的に行ってきた。藤井は、放火事件の動機の解明に迫りきれない点をもって作品の達成を否定するような水上自身の言及——例えば、「当然だろう。私はこのことを知りながら、それは後日にあずけて、一篇の悲恋物語を仕立てたにすぎない。」（『あとがき』『水上勉全集』第二巻、中央公論社、一九七七）など——が、同じく金閣寺の放火事件

天野知幸

を扱った「金閣炎上」執筆とリンクするように発表された言及であったことを明らかにするとともに、作品発表時に近接した次のような水上の言葉を踏まえ、「この作品の中心はあくまでも与謝の暗さを一身に背負った娘・夕子の生と死の軌跡のほうにこそあって、櫛田の存在はむしろその悲劇性をいっそう高めるための付随的なものであったということになろう。」と指摘する。

私はこの村に、一人の少女を置いてみたかった。このような淋しい土地にうまれた貧しい少女を、物語の主人公として追ってみたかった。与謝の暗さを一身にひきうけて、生きようともがきながら、結局、暗い運命に蝕まれて死んでゆく女のことを書いてみたいと思った。津母の村は、そのような女を私に夢みさせた。

「波暗き与謝の細道」(『旅』一九六四・四)

作品発表もないインタビューにおいて水上自身が、次のように述べていることから考えても、夕子に注目するこれらの指摘は重要だろう。

架空ではありませんがね。私は、金閣よりもむしろ、この女が書きたかったんです。京都というところは、表面はでも、こういう下積みの子でもっとるんですよね。空にそびえてる本願寺さんも、壬生寺にしても、これらの底辺の子のハダにふれあっているんです。そうした底辺から京都をみてみたい、いつもそう思うんです。

「底辺のハダにふれて」(『朝日新聞』一九六三・三・一一)

一方、岩淵の論では、その夕子の造型について、近松門左衛門「夕霧阿波鳴渡」の遊女夕霧を想起させる「伝統的な遊女の水脈にのって描き出された女性」との指摘を行い、作品の構造と夕子の他界性を明らかにしている。夕子という人物は、岩淵が指摘するように、三大太夫と呼ばれ、死後、歌舞伎「廓文章(吉田屋)」や近松門左衛門の浄瑠璃「夕霧阿波鳴渡」、さらには井原西鶴「好色一代男」など様々に書き継がれた伝説的太夫

夕霧が踏まえられているものと見てよいだろう。ただ、当時の性産業は、大きな転換期のうねりの中にあつた。夕子が働く場は、公娼制度が廃止されて以降の売春区域(「特殊飲食店街」)、いわゆる「赤線」であり、ここで働く者への抑圧的視線や、目前に迫っている売春の完全な処罰化は作品に暗い影を落としていた。彼女は夕霧という伝説化された太夫の名を負うものであると同時に、沼沢和子「敗戦日本の公娼と私娼——「五番町夕霧楼」と「泥の河」<sup>(4)</sup>」が、「この小説に登場する娼妓たちは、法的には五番町という特種飲食店街で働く「接客婦」ということになる。」と指摘するように、戦後の貧しい女性たちの働き場所の一つであつた性産業の片隅に生き、人知れず死んでいった一人の「接客婦」といふべき存在だろう。戦後の性産業のゆくえは、夕子という人物の造形にあたって、もう一つの重要な意味を持っている。

この夕子の職業とそれをめぐる時代的な転換が示すように、他者から向けられる抑圧的な視線、そして、他者理解や他者表象の困難さが、作品のなかでは大きな意味を持っている。京都府与謝郡の貧しい村樽泊で生まれ、上京区五番町にある夕霧楼で「接客婦」となり、故郷の村で自殺した夕子。夕子の姿は、夕子が働く夕霧楼の女主人かつ枝の視点に寄り添う語り手により、京都市上京区五番町という街から隔絶された土地樽泊と深

く結びつけられながら語られるのだが、かつ枝から眺められる夕子の内面は、彼女の故郷が辺境性を帯びているのと同じく、不可解で捉え難い。それは夕子の幼馴染である正順も同じなのだが、正順の場合、放火事件以降、新聞メディアによって彼の「内面」が書きたてられ、「犯罪者」として表象されてゆく。言語障害を持つ正順の途切れ途切れの言葉とは対照的な饒舌さで。

本論では、五番町と樽泊の空間的な関係性や、貧窮層の女性たちの働き場所の一つであった性産業をめぐる同時代状況に注意しながら、他者から向けられる抑圧的、差別的な視線や、他者理解、他者表象の問題がどう提示されているのかを考察してみたい。

## 二、夕子の辺境性

物語は、五番町で「夕霧楼」を営んでいた伊作が生家のある与謝半島突端の樽泊で孤独な死を迎え、それを見取った伊作の内縁の妻かつ枝が、同じ村の貧しい木樵の家の娘夕子を父親から託され、一九五一年九月二六日に京都へ連れ帰る場面から始まる。まずは、物語の構造や語りの特徴を確認しながら、かつ枝の夕子に対する眼差しのありようなどを考察したい。

夕子の生まれ育った与謝郡樽泊と、夕霧楼のある京都市上京

区の五番町。冒頭に置かれた伊作の死を見取るかつ枝の旅は、同じ府内の陸続きの地でありながら、両者が海を挟んで隔絶された場であることを描き出してゆく。京都府の日本海側に位置する架空の村、樽泊は、「陸路をとると宮津へ出るまでには、一台ぎりしかない木炭バスで四時間もかか」るため、海路をとる方が都合良く、その舟便も、断崖の続く与謝半島の東海岸の荒い海を越えてゆかねばならない。しかも、海岸線には鬱蒼と茂った黒い原生林が続き、断崖の続く海岸には荒い波が打ち寄せられる。「入り組んだ淵や、崖すその暗い樹の影を落した、紫紺色の海」。辺境性を帯びた風景は、かつ枝の目に与謝という土地を、あまりに「辺鄙」な場として記憶させるとともに、五番町との違いを印象づけるのだ。

一方の五番町。そこは西陣や上七軒に近い「古い色町」である。「色ガラスをはめた昔どおりの格子の窓」、通りすぎる男たちにかげられる「ひき手婆さん」の唸れた呼び声。「雛菊はん、照千代はん、紅葉はん」といった源氏名で呼ばれる娼妓たちや、周囲に位置する西陣や上七軒が持つ古い伝統と経済的な豊かさ。それは戦争を経ても変わらず京の色町が姿を保つ姿であり、樽泊とは別の意味で、物語化されて語られる街である。

それは、鉄道がないために物流からも人の流れからも隔絶された樽泊とあまりに対比的である。語り手は、前掲、沼沢和子

「敗戦日本の公娼と私娼——「五番町夕霧楼」と「泥の河」」が、「この小説のヒロインは夕子だが、語り手は彼女の内面を語らない。語り手がその内面にまで入り込む主たる視点人物は、夕霧楼の女主人のかつ枝である。」と指摘するように、五番町に住むかつ枝の視点に寄り添いながら、樽泊の辺境性を強調し、夕子にもそれを負わせてゆく。それゆえ、夕子の内面は、夕子自身の行為と会話からしか窺うことはできず、極めて捉えがたい。その理由は、後で述べるように、夕子が自らの感情を抑圧している点にあるのだが、夕子を育んだ樽泊が遠い辺境の地としてかつ枝によって捉えられていることも関係しているよう。例えば、正順との関係は、かつ枝にとって大きな関心となるが、彼と夕子との関係はそれが樽泊で形成されたものであるためか、夕子からの告白を聞くまでかつ枝は想像することしか許されていない。例えば、夕霧楼へやってきた日に夕子が、鳳閣寺の正順にハガキを出すのを、かつ枝が盗み見る場面では、夕子の過去への関心とそれへの触れ難さが樽泊の印象を伴って表現されている。

へけつたいなこともあるもんやな。あの娘、鳳閣寺はん  
に友だちがいるんやろか……

そう思った瞬間、あの与謝の樽泊の片桐三左衛門が、夕

子の名をかつ枝がたずねた時に、

「この娘オの名アは浄昌寺の和尚さんがつけてくれたり  
ましたンヤ」

と返事したことを思いだした。部屋にかえってからもかつ  
枝は耳にのこっている夕子の言葉をもう一つ思いだした。

〈浄昌寺はんが見えますナ。奥さん、あすこのお墓場  
はながいこと百日紅が咲いとります……〉

発動機船の甲板からみた、与謝の海べの段々畑の上方  
に、桃いろにかすんでみえた百日紅の花と、そり棟の屋根  
瓦を傘のようにひろげて、常緑樹の間にそびえていた田舎  
寺の本道の遠景だった。

そこに、夕霧楼を呉れた酒前伊作が眠っていた。骨をお  
さめて、まだ二日目の夜のことである。

かつ枝は樽泊で得た夕子に対する断片的な情報を再構成し、  
夕子と正順との関係を想像する。しかし、夕子の言葉や樽泊の  
風景は、かつ枝にそれらをつなぐヒントを何ら与えず、浄昌寺  
の墓場の百日紅や伊作の死といった死のイメージが高まってく  
るばかりだ。夕子の過去は、樽泊という土地に囲い込まれた謎  
としてある。これは、西陣帯問屋の大旦那竹末甚造による水揚  
げのエピソードにも共通しており、甚造は夕子の処女性を否定

するのだが、それを知る術ともなる夕子の樽泊での過去について、かつ枝が確かめる手立てはない。それもまた海の向こうにある辺境の土地に留め置かれたことがらだということになるだろう。

他方、夕子自身も、長年花街で生きてきたかつ枝の目をも混乱させるかのような二面性を持っている。かつ枝との最初の出会いの場面で夕子が見せる姿は、「器量のいい娘に似あわず、どこかしょんぼりとした、おとなしすぎるほどの佳さがあって、強いていえば影のうすいようなところがほのみえ」ものだったが、京都へ発つその翌日にははるかに垢抜けして見え、「成熟した女の匂いをたぶんに発散し」、かつ枝を驚かせる。この逸話は水揚げの場面でも反復されており、「甘柿のゴマみたいに、昂奮すると真緒に色づ」く雀斑と「小乳」を持つ「めずらしい軀」だったと興奮する甚造のことばに、かつ枝は、「与謝の樽泊の、うすぐらい酒前の家の裸電球の下で、妙に落ちついた気配をみせ、それでいて、おびえたような眼つきもしながら坐っていた夕子の顔と、翌日、柿の木の下へ妹をつれてやってきた時の、見ちがえるように発育した腰の線をみた時の驚き」を改めて回顧する。夕子の身体はかつ枝の思惑を裏切り、捉えがたいものとして常にたちあらわれるのだ。振舞いも同様で、「遠慮がちに娼妓たちの立居振舞を、淋しそうに眺めてい

るような時があるかと思えば、時には、はきはきと物をいい、言いたいことをずばりといってしまうような「極端な二面性を持ち、周囲を驚かせる。夕子の身体と内面は、かつ枝の視線を無意識に裏切り、欺くものとしてあるのだ。

彼女の二面的な性格には、夕子とかつ枝の関係が反映されているのだろう。すなわち、夕子は常に主張や感情を隠しながら振舞っており、とくにかつ枝の前ではそれが顕著だということだ。夕子が「時には、はきはきと物をいい、言いたいことをずばりといってしまうような」面を持っていても、それは他の娼妓たちとのやり取りで見せる姿に過ぎない。例えば、甚造以外の客をとり始めた夕子に、同じ娼妓のお新が、「竹甚はんの旦那はんが怒らはりませ」というのに対し、夕子は「年増女のようにつり上がった眼に微笑をうかべて、「怒らはったかて、かめへん。あの人だけが男はんやあらしまへんどっせ」と強気なことを言い、かつ枝にも同様の主張をするが、その時以外、かつ枝の前で夕子は沈黙を繰り返す。「へえ」という短い返事。「……」という沈黙。しばしば繰り返されるそうしたやりとりは、夕子がかつ枝との会話では自らの主張を抑圧していることを描き出している。正順との関係を止めようとするかつ枝に対して、一度だけ「いつになく熱っぽい口調」で語る場面もあるが、かつ枝は「このような強いところがあつたのかと

見直す思いが走」るものの、「そのような夕子の心は理解できても、その心が美しいと思える年頃ではな」と、かつ枝の側から夕子の声を封じ込めてしまう。このエピソードは、年上の娼妓敬子と夕子の病室での会話と対になっていて、「夕子の美しい心にふれたような気が」する敬子に対し、夕子は正順の悲しい生い立ちや、吃音による激しい差別やいじめについて、また、彼を兄と慕う自らの気持ちについて、実に詳しく語っている。夕子の心を美しいと思う敬子と、「敬子姉さん」と呼びかけ、「懇願するように」「敬子をみつめ」る夕子。互いに尊重し、信頼しあう関係は、夕子に自由な感情の発露を可能にするが、かつ枝との関係においてはそうではない。

このように見てくると、樽泊に対して心理的な距離感を感じるかつ枝の視線を媒介に、夕子の身体や内面、また、夕子自身の言葉は、捉え難いものとして語られているといえる。語りの特徴はここにあり、この作品において提示されるのは、夕子という女性の不明瞭な内面と声だ。これは言い換えれば、他者の前では語られない声や過去が夕子の中に沈殿しており、自由に自身の思いや主張を表現することを抑圧して振舞う夕子の内面や過去は、それを知らうとする者の手の届かぬところにあるともいえるだろう。かつ枝と同様に、読者もまた、それを想像することしかできない。

ところで、こうした夕子の造形は、正順のそれとアナロジーをなしているのではないだろうか。二人は唯一、互いの心を抱きあえる関係にあるが、正順は吃音という言語障害によって言葉を他者へと届けることに苦しむ人物である。ただ、正順の言語コミュニケーションにおける苦しみは、夕子のそれとは比較にならないほど過酷だ。例えば、病に苦しむ夕子を見舞おうともしない甚造の冷淡さと狡猾さに憤り、正順への疑いと蔑視を自ら反省したかつ枝が、夕子の病状を伝えるに鳳閣寺を訪れた場面では、正順が抱える身体的、精神的な過酷さが次のように表現される。

「……………」

正順の顔は急に歪んだ。う、う、う、と口の中で声を発したようだった。しかし、それは言葉にはならなかった。青ざめた顔が、急に充血したようにふくれ上り、いき張ったように、真緒になった。

正順はこのあとも、「いき張ったままだまって」おり、「何かをいいたいが見えたが、声が出ないらしかった」。そして、ようやく、しかし、はっきりと伝えたのは、「ゆ、ゆうちゃんに、安心せいで下さい」という伝言のみであった。本論の

最後で再び触れるように、正順の言語障害は放火事件を書き立てる新聞記事の饒舌さと対照的ともいえるもので、その対比は、貧しい家に生まれ、父が実父ではないという出自にまつわる正順の暗い過去や、吃音のために受けたひどい差別やいじめが夕子以外の他者には理解されえないものであったことを、はからずも浮かび上がらせる。正順の言語障害とそれに対する他者からの差別的な視線は、彼を苦しめ、反論や主張を奪い、コミュニケーションを断絶させる。そして、その苦しみを他者に打ち明け、和らげることも、言葉によるコミュニケーションの困難さから難しい。この場面における正順の発する「音」と身体性は、そうした他者からは容易に理解されえぬ身体的、精神的苦しみの表現といえるだろう。

物語はこのあと急展開を迎え、放火事件、正順の自殺、そして、夕子の失踪という悲劇的結末を迎えるが、ここに至り、正順の自殺の後に失踪した夕子がいかに厚い同情をもってしても理解しえない深いかなしみを抱えていたことに、かつ枝は思い至る。夕子を捜そうとする娼妓たちに、かつ枝はこう語りかけるのだ。

あては、よう行かんえ。夕子はんをそつとしといたげたい。気のすむようにそつとしておいたげたい。あの娘は

きつと夕霧へもどってくるがな。もどってきたら、みんな、なんにもいわんとな、温こうむかえてあげよやないか。せやないかいな。夕子はんの心のかなしみは、あてや、あんたらがどないはたからしよ思うたかて……どうにもならへんのや。ふかいふかいかなしみや。

最後の二文は、夕子のなかに安易な理解を拒む「心のかなしみ」の存在があることを提示している。それは故郷を同じくし、精神的な兄とも慕う正順とのみ分かちあうことのできる「かなしみ」であり、容易に他者が共有、理解できぬものとしてあるのだ。

水上は自作解説ともいえる前掲「あとがき」でこう語っている。

「文学界」編集長の小林米紀氏から原稿依頼をうけた時、私は、ながらく筐底にあったこの事件の聞き書きメモをとりだしてみたが、その時もまだ林君の放火動機について、確たる気持が推察しきれいでなかったので、事件そのものは遠くへ廻して、私流の女性を創って、林君の人間、あるいは放火動機をあぶり出す手法をとろうと思った。もとより、それで、ながいあいだ調査してきた同伴の全貌が括れ

るとは思っていなかった。

この言及を踏まえるならば、夕子の「暗い運命」や「ふかいふかいかなしみ」は、正順のそれを暗示させるものだとはいえるかもしれない。ただ、作品が提示しているのはむしろ、放火動機にせよ、当事者たちの内面にせよ、それらが他者によって容易に理解されうるものではないということではないだろうか。先に引用した、かつ枝の敬子たちに対する言葉は、かつ枝が理解するに至った他者理解の困難さを伝えるものであり、それを提示して終わるこの作品では、他者を理解する／語ることの困難さこそが示されているように思われる。

### 三、現代の遊女に対する抑圧的視線とその物語化

前節では、他者理解の不可能性やコミュニケーションの困難さを指摘しながら、夕子と正順との関係性について述べたが、ここではさらなる外部から「接客婦」たちに向けられる抑圧的な視線について考えながら、夕子と正順の紐帯について考察したい。

「夕霧楼の夕子やったら、びったりきますけどなア。」とかつ

枝のいう夕子は、岩淵論が既に指摘したように、その名からして夕霧太夫を髣髴とさせる名前を持っている。いや、名前だけではない。夕霧が病を患うのに対して、夕子もまた肺の病で倒れるという点でも符合する。ただ、「夕霧もの」としてよく知られる浄瑠璃「夕霧阿波鳴渡」や歌舞伎「廓文章（吉田屋）」が、落ちぶれた伊左衛門が最後には金を調達でき、それで夕霧を身請けして彼女の病も回復するというハッピーエンドの結末を迎えるのに対し、「五番町夕霧楼」の伊作にせよ、三左衛門にせよ、伊左衛門と名を通わせる男たちはそうした働きをしない。むしろ、三左衛門にいたっては夕子を苦界に沈める側にある。しかも、夕子の病は回復することではなく、彼女の自殺で物語は閉じられるのだ。このことから考えるに、「五番町夕霧楼」は「夕霧もの」を想起させる小説であるものの、その内容は浄瑠璃や歌舞伎で知られる伊左衛門、夕霧の恋物語を踏襲してはいないといえる。夕子の造型も同様である。太夫の地位にまで上り詰めた夕霧が諸芸に秀でていたのと異なり、夕子はこれといった取り柄を持たぬ女性として描かれている。それゆえ、彼女は夕霧のように、度々、その記憶が呼び戻される伝説的太夫の面影はなく、むしろその差異の方が夕子を意味づけているのだ。

遊女や遊郭という世界は古くから存在し、遊女に対する伝説



も数多く書かれたが、買春をめぐる実際の状況が不変だったわけではもちろんない。「パンパン」と呼ばれた街娼の女性たちの出現は、敗戦直後の社会・政治状況と買春とが深い関係性にあることを示すよく知られた例だが、夕子が勤める廓という場もまた、敗戦と占領、戦中から戦後にかけての困窮といった時代状況と深い関連を持っている。藤目ゆき『性の歴史学 公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優性保護法体制へ』<sup>5)</sup>は、近代における性産業の歴史を詳述しているが、そうした書を参考に、「赤線」登場に至るまでと「売春防止法」制定までをここで概観しておきたい。

敗戦後、「降伏してわずか三日目の八月一日、日本政府は占領軍用に性的慰安施設を準備してその営業を積極的に指導し設備の急速充実を図るように全国に指令、次いで公娼・私娼の売春業者、待合・料亭・カフェー及び「産業戦士慰安所」の業者などに RAA (Recreation and Amusement Association 特殊慰安施設協会) を結成させ、一億円の子算を投入、関係省庁を動員した<sup>6)</sup>」。占領軍対策のため、女性の性が組織的に動員、利用されたのである。しかし、性病蔓延などのため、一九四六年一月二日には公娼廃止に関する覚書「日本における公娼制度廃止に関する件」が GHQ によって出され、公娼制度そのものが廃止される。ただし、個人が自発的に売春することは禁じら

れておらず、「個人の自由意志による営業であるとの名目でもくだけでも管理売春を続けることが可能<sup>7)</sup>」で、政府は指定した集娼区には警察から風俗営業の許可を与えて黙認した。これが「特殊飲食店街」、いわゆる「赤線」である。ただ、こうした黙認区も長くその存在を維持することはなかった。「接客婦」の拘束や不当な搾取といった経営者側への「処罰規定」など「接客婦」自身にとって救いとなる規定も出されたが、一九五六年には「売春防止法」の制定、すなわち売春という行為自体が完全に処罰の対象とされる状況——それはつまり売春を行った女性が処罰されるということだが——を迎える。

夕子と夕霧とが決定的に異なるのは、後者が伝説的な大夫として現代に至ってからもその記憶が継承され、繰り返し物語化・美化されていったのに対して、夕子は娼娼運動および「処罰規定」「取締条例」などにより否定もしくは規制される場において、その性と生を生きなければならなかった人物として描かれているという点である。ちなみに戦後においても、夕霧の記憶は、歌舞伎や浄瑠璃、地歌だけでなく、「夕霧供養祭」、和菓子といった形で呼び戻されていた。ちょうど作品が発表される二年前の一九六〇年一月一日には、夕霧の墓があるときとされる嵯峨釈迦堂清涼寺境内に夕霧を偲んだ吉井勇の歌碑が建てられている。こうした夕霧の記憶の喚起は、それが観光を当て

込んだものであったとしても、吉井の短歌「いまもなほなつかしとおもふ夕霧の墓にもうでしかへり路の雨」が物語るように、戦後にも夕霧の記憶が美化されながら再生されていたことを示している。つまり、現代に生きる娼婦の夕子と伝説的太夫の夕霧とは、同じ娼婦でありながら、向けられる眼差しが決定的に隔たっているのだ。伊藤栄樹「売春・麻薬・暴力」<sup>(8)</sup>は、「赤線区域」が「児童福祉法、性病予防法等の適用をみる場合を別にすれば、黙認の形で取締りのラチ外におかれていた」状況から、次のように法案の提出が進められるまでをまとめてい

る。

昭和二八年の第一五回国会をはじめ、第一九回、第二一回、第二二回の各国会においても、「売春等処罰法案」が議員により提出されたが、否決されたりして、成立をみなかった（なお、昭和二三年の第二回国会には、同名の法案が政府によって提案され、審議未了に終わったことがある）。／一方、政府においても、昭和二八年から昭和三〇年にかけて、内閣に売春問題対策協議会を設置して、この問題について検討するところがあったが、昭和三十一年には、総理府に売春対策審議会が設けられ、その答申を得て、同年の第二四回国会に「売春防止法案」を提出し、可

決成立のうえ、同法は、同年五月二四日法律第一一八号として公布され、刑事処分に對する規定は昭和三三年四月一日から、その他の規定は昭和三二年四月一日から施行されることになり、「赤線区域」の存在はもとより、一切の売春を禁ずる趣旨が宣明された。

こうした状況下、娼娼運動に参加する同性の眼差しはどのようなものだったのだろうか。前掲、藤目ゆき『性の歴史学 公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優性保護法体制へ』によれば、近代日本の娼娼運動は芸娼妓への「醜業婦」観を有しており、それは長らく変化しなかったようだ。娼娼運動に参加した女性たちの多くには、同じ女性である芸娼妓への共感は不在であり、敗戦後、極度の経済的圧迫を背景に売春ブームが起きてゆく際にも、「占領軍と市民的な女性団体全般の良好な関係を背景に、彼女たちのイニシアチヴで売春禁止運動が展開」（同書）されるとい

う。

「売春防止法」が制定されるのは一九五六年であり、物語の現在（一九五一年から一九五二年）からはまだ四年ほど時間があるが、そこに至るまでも、一九五一年には「講和条約締結と同時に占領下の娼娼令が廃止されることに反対して」、「公娼制度復活反対協議会」が結成され、翌五二年には「売春禁止法制

定促進委員会」へと発展、また、五三年から五四年にかけて売春禁止法制定に向けて法案が女性議員らによって提出されるなど、売春を禁止する法律制定の準備は、女性議員らも積極的に参加して着々と進められていた。「赤線」と呼ばれた集娼区はもちろんその対象でないはずはなく、例えば、運動の先頭に立った一人、神近市子は、「婦人は一つの十字軍を」(『読売新聞』一九五三年一月二五日朝刊)という記事において、近く国会に提出されようとしている法案が「今日黙認された形になっている赤線区域の存続を、絶対に否定している点は注意すべきであろう」と述べている。

こうした状況を踏まえると、物語の現在が、実際の金閣放火事件のあった一九五〇(昭和二五)年ではなく、一九五一年から翌五二年に設定されている点は興味深い。「売春防止法案」可決を目前に控えた時期の物語として理解するならば、伝説的太夫夕霧の名を負う夕子の死は「接客婦」の未来を暗示するものとして読むことも不可能ではないからである。なお、売春をめぐるこうした社会状況は、苛烈な搾取や束縛といったそれまでの廓のイメージと比べて、「終戦後」の娼妓がいかに自由で厚遇であるかを、妓楼経営者の立場から強調する、かつ枝の言葉に上ることは少ないが、売春そのものに対する抑圧的な視線は、それとなく書き込まれている。

例えば、「終戦後は、昔のように、借金で軀を売らはって、稼いだお金を抱え主さんにみんな取られてしまわはるちゅうようなことは、あらしまへんよってにな。はじめから割り切って、うちの店へおつとめにおいでやす娘はんもいやはるようになりました。そうやさかい、何も、つらいところへ身売りしたちゅう感じはおへんのどっせ。せやけど、世間はええ目でみやはらしまへん。まるで人間の屑みたいに思うていやはりますねん。せやけど、人さんのいわはるほど、つらいとこやおへんのどすえ。」というかつ枝の言葉もその一つだが、最も注目できるのは、敬子のエピソードである。二三歳の敬子は、「娼妓にはめずらしく理知的で、旧制の女学校を出ている」女性であり、家族のために身を売る女性であるが、そのささやかな楽しみとして歌を詠む彼女が、歌を投稿していた雑誌『令女苑』の巻頭文「娼娼問題と現代風俗なる一文」をじっと読み入る場面がある。「敬子は本棚から、新しく配達されてきた令女苑をとり出し、べらべらと目次を繰って、巻頭の女性評論家が発表している、娼娼問題と現代風俗なる一文に興味をもって、読み入っていたのだが」とあるだけで、敬子の心情や記事の内容は語られていないが、廓での生活を次のような短歌に詠み込んで『令女苑』に投稿していた敬子にとって、その記事が自らの生きる場を問うものであったことは間違いないだろう。

あこがれは里にはあらず天神の木立の森の青き空かな  
べたべたとスリッパの音の冷たくて廓づとめにわれは狎れ  
ゆく

疲れたる瞳にあはき朝方の花を呉れたる人の名を知らず

敬子は雑誌に掲載されたこれらの短歌を夕子に見せる際、啄木の歌「働けど働けどなおわがくらし楽にならざりじっと手を見る」を夕子に教えている。廓は敬子にとって労働の場であり、生活の場である。「あこがれ」を北野天満宮の「青き空」に遠く夢想するも、彼女の身体と生は、廓という場のなかで日々その営みを送っているのである。これらの短歌には、悲嘆や絶望とは異なる「廓づとめ」における心理——自らの生活の場として「狎れゆく」敬子の心のありよう——が表現されているように思われる。おそらく、敬子のエピソードは、彼女たちの生きる「廓」という場が廃娼運動の大きなうねりの渦中にあることを暗示するだけでなく、敬子たち娼婦の女性が、その生やその生きる場とは無関係に、彼女らの性と生を語る言葉に囲繞され、一方的な視線にさらされていることを示すものなのではなからうか。夕子や敬子が体現するのは、そうした世間の視線や政策とは無関係に、自らの性を売り、貧しい実家へと送金する（せざるえない）女性の姿であるが、語り手は「赤線」の

内部へと視線を投じながら、女性の性道徳を説きつつ戦後の女性の地位向上を背景に自らの意識を高めようとした廃娼運動家たちの論理とは別の論理で生きる（せざるを得ない）夕子や敬子の生と性を語ってゆく。夕霧と二重映しにされた夕子の姿とその悲劇的な死は、「接客婦」を消えてゆく存在として美化し、物語化する危険性を多分に持っていて注意すべきだが、夕子や敬子の性と生を前景化しつつ、廃娼運動とそれを対置する物語の構造自体は、廃娼運動家らの視線や言葉を相対化する方向性も同時に持っている。

このように考えると、夕子が正順の代弁者となることは、両者が他者から向けられる視線のベクトルを考えるとよく理解できよう。彼らは樽泊という故郷、そして正順の実家である寺という二つの場を共有するものであると同時に、抑圧的な視線にさらされる者同士だからだ。

二人は共に結末において孤独な死を迎えるが、正順を語るメディアの言葉は、あまりに饒舌であり、それゆえに虚しく響く。最後に、放火事件の報道に関する記述を分析しながら、他者表象の困難さがどう提示されているのかを考察したい。

#### 四、まとめにかえて——相対化される〈事実〉

正順が自ら修行する北山の臨済正宗燈全寺派鳳閣寺に火をつけたのは、かつ枝が正順のもとを訪れた日の深夜の一九五二（昭和二七）年八月二日未明のことだった。この金閣寺をモデルとする架空の寺、鳳閣寺とは、作中には「これを眺め入る者に、建築と庭園の織りなす古典美を十分に味わせると共に、激しかった動乱の大戦争が、まるで嘘であったかのような錯覚を感じさせる」とある京都を象徴する国宝である。作中ではこの事件について、『毎朝新聞』という架空の新聞記事を引用する形で形象されるのだが、興味深いのは、それが『朝日新聞』（東京版）からの引用によって構成されている点だ。夕子が生きたる「廓」という場に対する視線が『令女苑』という雑誌記事によって示されていたように、全国紙のしかも東京版の記事が、正順の人物像や内面を書きたて、彼に向けられる視線のありようを描き出す。

「その日の新聞各紙は、歴史的な鳳閣の炎上をそれぞれ第一面に掲げ、心なき一徒弟の犯した罪について、筆をそろえて罵言と憐恨とをもって記録した。その中の一紙である、当時の毎朝新聞のニュースをここに掲げてみると、次のように報じている。」と始まる記事の引用は次のようなものである。

鳳閣寺全焼す・放火容疑者を手配・徒弟A大学学生

〔京都発〕二日、午前一時五十分ごろ、京都市上京区鳳閣寺町、臨済宗燈全寺派別格地鹿園寺（通称鳳閣寺）庭園内の国宝建造物、鳳閣から出火、全市の消防署から消防車数台が出動したが、こけらぶき、クスノキ造り、南北五間半、東西七間の三層楼はすでに火災につつまれて手のつけようがなかった。初期足利時代の代表的建築として知られた国宝の三層楼は内部の古美術品とともに、一時間後に全焼し、境内にある朝雲亭など三十余りの他の建物は類焼をまぬがれたが、市警では出火の前後から行方をくらました同寺の徒弟樺田正順（二一）ⅡA大学文学科二年生、京都府出身Ⅱを手配している。

これは次に引用する一九五〇年七月三日付の『朝日新聞』（東京版・朝刊）の記事と、固有名や細部の変更はあるものの内容はほぼ同じものとなっている。

放火容疑者を逮捕 徒弟の大谷大学々生

〔京都発〕二日午前二時五十分ごろ京都市上京区衣笠金閣寺町臨済宗相国寺派別格地鹿苑寺（通称金閣寺）庭園内の国宝建造物、金閣から出火、全市の消防署から消防車十台

が出勤したが、コケラぶき、クスノキ造り南北五間半、東西七間の三層楼はすでに火災につままれて手のつけようがなく、初期足利時代の代表的建築として知られた国宝の三層楼は内部の古美術品とともに、一時間後に全焼、境内にある夕桂亭など三十余りの他の建物は類焼をまぬがれた。市警では出火の前後から行方をくらました同寺の徒弟林承賢（二一）Ⅱ大谷大学支那語学科一年生、福井県出身Ⅱを二日午後七時放火容疑者として検挙した。

固有名以外の変更で重要なのは、実際の事件では容疑者がすぐに逮捕され、公判の記事がのちに掲載されていることである。実際の金閣寺放火事件とは異なり、検挙後、留置所で頸動脈を切り、自殺を図るといふ展開を辿る「五番町夕霧楼」においては、公判の記事は存在しない。しかし、「鳳閣と心中の覚悟」「自殺しそこねて自供」「孤独な性格・住職の話」「勝負事が好き・学友の話」「義満の木像」も焼失・破損していた火災報知機、「国民的な痛手・東京美術大学学長の話」、「文部省で実地検証」、「鳳閣放火の責を負い樫田の母親が自殺・列車から川へとび込む」、「母の面会を拒む・四年来一度も会わぬ」、「美しさ」に反感・樫田放火の動機を自供、「分裂型変質者・内田博士語る」と続く事件直後の『毎朝新聞』記事は、すべて

『朝日新聞』（東京版）の七月三日、四日（いずれも朝刊）にそれとほぼ同じ小題、内容の記事を見つけることができる。<sup>9)</sup> 実は、事件に関する記事であれば、例えば『京都新聞』の七月三日（朝刊および夕刊）、四日（朝刊および夕刊）や同じ『朝日新聞』でも大阪版により詳細なものを見ることができ<sup>10)</sup>。放火事件に関して新聞記事に切り抜きを集め、実地調査まで行った水上であれば、こうした記事を引用することもできたはずだ。<sup>11)</sup> しかも「新聞をみた夕霧楼のかつ枝は、驚愕のあまりに腰をぬかした」、とあるように、かつ枝をはじめとする「京都市民」の驚きを描きこむ物語の筋に即せば、「京都発」と記事冒頭に書かれる東京版の『朝日新聞』記事を引用するのは不自然ともいえる。

このことは何を意味するのか。住職や学友といった正順に「身近」な人物のほか、「東京美術大学学長」、「文部省」の関係者、「B大医学部精神科主任教授」といった正順とは面識のない人物たちの言葉が新聞というメディア上に集められているわけだが、「東京美術大学学長」、「文部省」の関係者、「B大医学部精神科主任教授」の見解はもとより、住職の「私のいうことなど聞かず、同僚ともなじまない孤独な性格の持主で」という言葉や、学友の「毎晩のようにカケ碁や花合せにこり、小遣いに不自由するとカツギ屋をやっているというウワサもあった」

という言葉に、正順への寄り添いの姿勢はない。むしろ正順の「異常さ」を強調する。いや、そうした言葉が記事として選ばれているのだ。水上は前掲「あとがき」で、「当時の新聞記事」発表の金閣寺住職の談話において「放火した徒弟を在俗の人々と同じ立場から「犯罪者」と指していることに不満をおぼえた。」と記しているが、「五番町夕霧楼」という作品は、夕子という人物が親しい同僚に明かした正順についての言葉と新聞記事を対比する。そして、両者の明瞭な対比によって、事件の真相とも言うべき動機や容疑者の人物像を解き明かし、伝達することを目的とする新聞メディアの言説や正順を一方的に語る言葉を相対化する。おそらく、東京版の記事が選ばれているのは、メディア上の言説と正順との距離を強調するための工夫であろう。『令女苑』の廃娼運動記事がそうであったように、メディア上での表象と当事者たちの姿とが対比的に位置づけられるのだ。

「新聞の記事などが何も伝えるものでないことは水上氏も知っている。」と吉田健一「解説」<sup>(12)</sup>が指摘するように、ここではメディアの問題も問われているように思われる。正順に対して語られる様々な言葉は、先に述べたように、彼の発する切れ切れの言葉と激しいギャップを有している。正順の言語障害とそれに向けられる差別的な視線は、彼から自らを自由に語る言

葉を奪っていたが、そうした正順の身体と生に無関係に、メディアの言葉は彼を表象し、意味づける。

このように見えてくると、空間的、心理的距離が巧みに利用されるながら、他者理解、他者表象の持つ困難さや暴力性が様々な形で描かれていることがわかる。与謝郡の樽泊という辺境の地に向けられる五番町のかつ枝の眼差し。そして、「赤線」という場に向けられる廃娼運動家からの眼差し。吃音の正順に向けられる差別的な眼差し。それらの位相は全て異なるが、どの視線のベクトルも外側から一方的に向けられる暴力性を有しているのではないだろうか。物語はそれらを相対化しつつ、他者理解の困難さを提示する。かつ枝の場合、結末において夕子の「ふかいふかいかなしみ」には容易に近づけぬものである認識が最後に示されていた。しかし、正順の場合はどうだろう。彼は死してなお、一方的に表象しようとする言葉の暴力を浴び続けるだろう。水上は、故郷の地で自らの命を経った夕子のなかに正順の苦悩を閉じ込めることで、これ以上触れられぬものとしてそれらを留め置き、抑圧的な言説の力を転倒させて見せているのではないだろうか。

注

- (1) 「描かれた人間模様」(『朝日新聞』一九六三年三月一日)という新聞掲載の読書欄には、「この小説は金閣寺焼失の裏面や側面をえぐり出したもので、作者得意の推理小説ではなく、読者が金閣寺焼失の事実も、三島由紀夫の小説『金閣寺』も知っ  
ていながら、なおかつ別個な興味にひかれて読ませる作者の筆力と才腕をうかがうに足る作品である。」と記されている。水上自身も、「あとがき」(『水上勉全集 第二巻』再版、一九八二年)において、「この作品が発表されると、時評家の賛辞があった。なかに名はわずれたが、放火した林君の心理についてもう少しわしく書けなかつたか、と不満を述べられる批評家があった。」と記している。
- (2) 藤井淑禎『五番町夕霧楼』の復権(『東海学園国語国文』一九八一年一月)
- (3) 岩淵宏子『五番町夕霧楼』(『解釈と鑑賞』一九九六年二月)
- (4) 沼沢和子「敗戦日本の公娼と私娼——「五番町夕霧楼」と「泥の河」」(岡野幸江／長谷川啓／渡邊澄子共編『買売春と日本文学』二〇〇二年、東京堂出版、三〇三頁)。なお、同論は、大日方純夫「日本近代国家の成立と売娼問題」(総合女性史研究会『性と身体』吉川弘文館、一九九八年)の「別表 全国の遊郭と娼妓数(一八八一年末現在)」をもとに、五番町が維新以前からあった京都の遊郭の一つであったことを指摘している。
- (5) 藤目ゆき『性の歴史学 公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優性保護法体制へ』(不二出版、一九九九)
- (6) 注5に同じ。三二六頁。
- (7) 注5に同じ。三二七頁。
- (8) 伊藤栄樹「売春・麻薬・暴力」(『ジュリスト』特集「売春・麻薬・暴力——戦後法制度の20年」、一九六七年一月)
- (9) 『朝日新聞』(東京版)の一九五〇年七月三日、四日(朝刊)の金閣寺放火事件に関する記事小題は以下の通り。七月三日「放火容疑者を逮捕 徒弟の大谷大学々生」、金閣と心中の覚悟 自殺しそこねて自供、「孤独な性格 村上任職の話」、「勝負事が好き 学友の話」、「義満の木像」も焼失 破損していた火災報知機、「国民的な痛手 上野芸術大学長の話」、「文部省で実地検証」、七月四日(金閣放火の責負い 林の母親が自殺 列車から川へ飛込む、「母の面会を拒む 四年来一度も会わぬ」、「美しさ」に反感 林、放火の動機を自供、「分裂型変質者 内村博士語る」)。
- (10) 例えば、『朝日新聞』(大阪版)の七月三日(朝刊)の関連記事小題は以下の通り。「金閣、放火で全焼」、「犯人林承賢捕る 自殺しそこねて自白」、「学校さぼってしかられる」、「五百五十年前の創建」、「更生させたい 村上任職の話」、「勝負事が好き 学友の語る林」、「防火対策に欠く」、「復興には二年 一千二百万」、「必ず再建 村上任職の決意」、「国宝指定 解除か」。
- (11) 前掲「あとがき」には、「私は、新聞や雑誌の文章の切り抜きをつくる一方で、京都へ行くたびに、私の小僧時代の知友にあたって、事件の真相を探ってきた。」と記されている。
- (12) 吉田健一「解説」(水上勉『五番町夕霧楼』新潮文庫、一九六六年)